



愛光NEWS

2024年11月

2024（令和6）年11月吉日発行

（編集）愛光本部

（TEL）043-484-6391

（HP）<https://www.rc-aikoh.or.jp/>

11月10日、第32回根郷ガーデンカップサッカー大会が、佐倉市山王地区にある山王小学校でFC根郷(サッカークラブ)の主催により開催されました。出場資格は小学校1年生から2年生で、優勝を目指して熱戦が繰り広げられました。

愛光後援会「愛の灯台基金」では、今年も大会への助成を行いました。これからも、さまざまな地域貢献活動を進めていきたいと思ひます。

□事業経過など（2024.11.1～）

5	火	ともいきP会議
6	水	ともいきPT/コ・ヒューマントレーニングWT/口腔ケアセミナー
7	木	メンター委員会
8	金	業務執行会議/法人権利擁護研修
9	土	産業博覧会
10	日	産業博覧会
12	火	業務執行会議/衛生委員会・感染症対策委員会/防災委員会
13	水	子育て応援WT
14	木	広報委員会/後援会運営委員会
15	金	ボランティア委員会
16	土	山王みらいプロジェクト
18	月	入退所WT/テクニカルスキル研修
19	火	南図書館販売会/佐倉圏域事業部実績会議
20	水	地域食堂ともいき
21	木	リスクマネジメント委員会/メンター情報交換会
22	金	70周年WT
23	土	理事会
24	日	山王ゼロ円バザー
26	火	法人コンプライアンス委員会/経営戦略会議
27	水	障害者支援事業部実績会議/財務P/地域福祉事業部実績会議
28	木	高齢者福祉事業部実績会議
29	金	本部実績会議

■ 月報から

□ 食事懇談会（ルミエール）

17日の家族会では、食事懇談会を開催し、武石栄養士と厨房職員の高橋さんに参加していただき、栄養士業務と厨房の業務についてご家族に説明していただきました。栄養士からは、普段ご家族に見えにくい業務内容として、献立作りだけでなく、利用者の嗜好調査、嚥下状態や健康状態の把握、施設や健康管理室との連携による栄養ケア計画の作成など、多岐にわたる業務があることが紹介されました。また、厨房業務についても、ただ食事を作るだけでなく、常に感染症や衛生面に配慮しながら、安全でおいしい給食を3食365日提供していることが説明されました。

利用者と同じ食事を召し上がったご家族からは、「毎日このような食事を提供していただけることに感謝します」という最高の言葉をいただきました。物価高騰で食材費を心配する声が多い中、これからもおいしい給食を提供していけるよう努めていきたいと思えます。

（ルミエール課長 原 宏之）

□ おひさま祭（めいわ）

おひさま祭は、ご家族も参加する「めいわ」の一大イベントですが、コロナの影響でしばらくの間、ご家族を招待できないまま開催していました。それから数年が経ち、今回は以前のようにご家族も参加できるお祭りとして復活することとなりました。

以前は、利用者による劇の披露や、みんなで餅つきをして楽しんだこともありました。当時は利用者もご家族も私たち職員も若く、活気にあふれたお祭りでした。その頃とまったく同じ内容で行うことは今の状況では難しいかもしれませんが、「みんなが一緒に楽しめるお祭り感やライブ感を感じられること」や、「久々の家族参加を通じて、めいわの職員や利用者の日頃の活動を知ってもらうこと」をテーマに掲げました。

これらのテーマをどう具体化するかについて、係の職員たちは頭を悩ませながらも、さまざまなアイデアを検討しました。その結果、とても良いお祭りになったと思います。

当日は17名のご家族が参加されました。まずは職員とご家族一人ひとりの自己紹介から始まり、次に「めいわの日常」や「コロナ禍での様子」を、クイズ形式で楽しみながら写真を交えて紹介しました。

日中活動の紹介コーナーでは、利用者の皆さんがステージ上で実際の活動の様子を再現しました。

- 受注班：フルーツキャップの作成工程
- 農耕班：堆肥をふるいにかける作業
- 手工芸創作班：缶つぶしやさりを織りの工程

ご家族の皆さんは普段目にする事のない活動に、興味津々のご様子でした。

最後には、いざいざ班がフォークダンスを披露しました。班のメンバーが前の人の肩につかまり、音楽がスタート。飛び入り参加も大歓迎で、多くの利用者が楽しく踊りに加わりました。そして締めくくりは、日頃の感謝を込めたご家族へのプレゼントタイム。創作手工芸班が制作した「さをり織りのコースター」を一人ひとりに手渡しました。アイデア満載の楽しいお祭りは、大成功のうちに幕を閉じました。

今回のお祭りを通じて、利用者、職員、ご家族の距離がぐっと縮まったように感じています。

（めいわ課長 中田 憲一郎）

□キャリアの棚卸し（リホープ）

リホープの職員 33 名のうち、30 代の職員は 9 名います。この 9 名は、職業的なキャリアを 10 年前後積み、リホープの中心的な業務を担うメンバーです。そこで、彼らを集めてキャリアの棚卸しを行いました。

キャリアの棚卸しとは、社会人になってから現在までの経験を振り返り、それを言語化する作業のことです。愛光で 15 年働き続けている職員もいれば、一度福祉の仕事を離れて一般企業で働き、再び福祉の現場に戻ってきた職員もいます。また、愛光の中で高齢者施設から障害者施設に異動した職員や、障害者施設 3 施設すべてを経験した職員もいました。それぞれが自身のキャリアを語り、強みや弱み、そして仕事に対する想いを共有しました。

話を進める中で、「なぜ自分は福祉の仕事を選んだのか」という問いに立ち返り、「人と関わることが好きだから」と改めて気づいた職員もいました。また、今後のキャリアについて話し合う中で、「いろいろな施設を経験して視野を広げたい」「これまでの経験をリホープで生かしていきたい」といった前向きな意見も多く聞かれました。

お互いの強みを尊重し、苦手な部分は補い合いながら、チームとして協力し合える関係を築くことが目標です。そうした環境の中で、職員一人ひとりが自律的に仕事に取り組み、さらなる成長を目指していけることを期待しています。（リホープ副施設長 麻生 知明）

□利用者について（山王の家）

例年に比べて今年は暖かい日が続いていましたが、急に寒くなったことで体調を崩してしまった C さん。熱は出ませんでした。のどの痛みと咳の症状がありました。早めに薬を服用して対応していましたが、声が出なくなりました。

C さんにとって、話すことはストレス発散の手段でもあり、声が出ない状況は大きな不安をもたらしていました。最初は無理をして話そうとしていましたが、次第に「このまま声が出なくなったらどうしよう」と不安な様子が見られるように。周囲から「無理せず休むことが大切」という助言を受け入れ、静かに過ごすことにしました。

その甲斐あって、少しずつ声が出るようになりましたが、完全に回復するまでには 2 週間以上かかりました。（山王の家管理者 岡本 綾子）

□カフェスペースの貸出し（ワークショップかぶらぎ）

昨年に引き続き、城の辺地区社協の買物支援事業に携わるスタッフとその利用者の交流会で、ワークショップかぶらぎのカフェスペースをご利用いただきました。

前回は、初めて 20 名規模のお客様に対応することとなり、配置した利用者の人数が足りず、スタッフが全面的に動かざるを得ない状況で、とにかく慌ただしい一日となりました。その反省を踏まえ、今回は受け入れ準備に力を入れ、対応する利用者を 4 名に絞り、それぞれの得意分野を活かして大人数への対応を計画。入口での対応から飲食の提供、お帰りの案内まで、人の流れと自分の動きを具体的に考え、シミュレーションを行いました。

当日は事前準備の甲斐あって、前年のような混乱もなく、入口からお見送りまでスムーズに対応することができました。スタッフは控えに徹することができ、利用者自身の仕事として十分に成立していたように感じます。

今回のような取り組みは、パントリー事業と並ぶワークショップかぶらぎ流の地域交流の一環として、今後も機会を設けていきたいと考えています。

（ワークショップかぶらぎ主任 宮部 和樹）

□今後の展望「地域連携推進会議」（ジョーの家）

来年度から年1回以上の開催が義務化される「地域連携推進会議」を、今年度は努力義務ではありましたが、次年度に向けた準備期間として実施しました。この会議の目的・役割は、施設と地域が連携することで「利用者と地域との関係づくり」「地域の人々への施設や利用者に関する理解の促進」「施設やサービスの透明性・質の確保」「利用者の権利擁護」を実現することにあります。会議には地域の関係者を含む外部の方々に参加します。

今回の会議では、ジョーの家の入居者1名、ご家族1名、民生委員1名、佐倉市障害福祉課職員1名、グループホーム支援ワーカー1名、近隣のグループホーム関係者2名の計7名が委員として参加し、オブザーバーとして5名が加わりました。内容は「ジョーの家概要説明」「ジョーの家での生活について」「意見交換」の3つの議題で構成されました。

「ジョーの家での生活について」では、入居者とご家族がそれぞれの言葉で生活について語り、入居者が主体的に地域生活を送る姿勢や世話人の支援内容が委員の皆さんに伝わったようです。「意見交換」では、食事の提供方法や余暇活動について活発な意見が交わされました。

この会議を通じ、普段顔を合わせる機会の少ない同業者同士が交流することで、相互理解が深まり、新たな協力体制の構築につながる場となりました。また、グループホーム間での情報共有や地域住民にとって施設の存在を知る機会となり、ジョーの家としても取り組みへの理解を深めてもらう良い機会となったと感じます。さらに、ジョーの家の認知度向上を通じて、地域社会との関わりが広がり、地域資源の活用や地域の祭り・イベントへの参加といったきっかけにもつながる可能性があります。

また、会議の中では「地域連携推進会議」自体の意義についても議論がありました。この会議は、入居者がより自分に合ったグループホームを選択する手段となり、QOL(生活の質)の向上を通じて、入居者が自分の望む生活スタイルを主体的に選択する機会を提供するものであるとの認識が委員間で共有されました。

今後、「地域連携推進会議」はグループホームと地域が一体となり、入居者が地域社会で安心して暮らすために欠かせない取り組みとなるでしょう。より良い地域社会の実現に向けて、地域と連携しながら継続的な努力を続けていく必要性を改めて感じた会議でした。

(ジョーの家 高橋 健)

□BCP訓練をやろう。（よもぎの園）

災害時に事業を継続するため、帰宅困難者が発生した場合を想定して炊き出し訓練を実施しました。これまでも帰宅困難者用として非常食(一食ずつ個別包装されたもの)を備蓄しており、賞味期限が迫るたびに入れ替えの際、非常食体験として利用者に提供してきました。しかし、個別包装の非常食は準備に時間がかかるうえ、ゴミの量が多いといった課題があり、改善が求められていました。

今回は新たに災害物品としてコンロカートとLPガスをよもぎの園に配備したことを受け、生米をコンロカートで炊飯し、利用者に提供できるか確認するための訓練を計画しました。調査によれば、炊飯に必要な水分量は米1合(140~150g)に対し水200ccと判明。今回の訓練では50人分を想定し、3升(30合)の米を炊くために必要な水6ℓを準備しました。水は2ℓペットボトル3本を用意すれば、災害時にも計算せずに迅速に対応できると判断しました。

訓練に向けてキャンプ動画などの情報を参考にしながら、「生米に水を吸わせる時間は〇〇分」「水が沸騰したら極弱火で〇〇分」「その後〇〇分蒸らす」など、手順を確認しましたが、

「焦げてしまったらどうしよう」「炊けなかったらどうするか」といった不安も抱えつつ実施。当日は職員が試行錯誤しながら炊飯に挑戦しましたが、結果は大成功でした。実際の災害時には炊飯した米でおにぎりを作り、汁物を添える程度の対応しか難しいと思われそうですが、今回は BCP(事業継続計画)訓練として炊飯を目的としたため、訓練後は食事会としてカレーと豚汁、地域の方からいただいた冬瓜を使った炒め物を提供しました。また、天候に恵まれたため、家族会から寄贈いただいたテントを活用し、屋外での食事会を実施。利用者も楽しそうに参加してくれました。災害が起きないことが理想ですが、いずれ必ず起こるものと心得、必要な準備を進め、災害時に役立つ知識を引き続き学んでいきたいと感じました。
(佐倉市よもぎの園主任 近藤 真一)

□佐倉市市制施行 70 周年記念 佐倉・産業大博覧会 2024 ～あつまれ！佐倉の農・商・工～佐倉産業大博覧会(アシスト)

9日と10日の両日、草笛の丘で佐倉産業大博覧会が開催され、市内の委託相談支援事業所もブースを設けて参加しました。相談支援事業所連絡会で内容を検討し、主担当の事業所を決めたうえで実施し、今年度は主担当ではありませんでしたが、2日間にわたり交代で参加しました。

福祉について一般市民に興味を持ってもらい、知る機会を提供することを目指し、特に子どもたちへのアプローチに重点を置きました。これは将来的な福祉人材の確保に繋げる意図もあります。ブースでは子ども向けに簡単なクイズコーナーを設置し、景品を用意して楽しんでもらえるよう工夫しました。

当日は佐倉市内の福祉事業所の出店に加え、農産物の販売やキッチンカーも並び、多くの来場者で賑わいました。相談支援事業所のブースにもたくさんの方が立ち寄り、賑やかな雰囲気の中で活動を展開できました。クイズの内容については、子どもにもわかりやすい問題を考えるため、市内の相談支援事業所が連携し、垣根を越えて協力しました。

(佐倉圏域事業部長 近藤 美貴)

□はちす苑特養に於いて新型コロナウイルス感染症発生 (はちす苑)

11月11日(月)、花の街職員2名が新型コロナウイルス感染症に感染しました。今年の5月以来の発症でしたが、幸いにもご利用者2名と職員7名の感染にとどまりました。

新型コロナウイルス感染症は、5類となった後、マスコミの報道は大幅に減少していますが、毎年冬と夏には日本全体で感染者が増加しているのが現状です。そのため、集団生活を送る障害者施設や高齢者施設では、引き続きマスク、消毒、検温などの感染対策が実施されています。また、インフルエンザなどの感染症が増える季節でもあり、世間でもマスク着用者が増加しています。この状況がいつまで続くのか、先行きは見通せません。

マスク着用が当たり前となり、慣れてしまっている反面、マスクを外せないことや素顔でのコミュニケーションが難しいことが、人とのつながりに悪影響を及ぼしているという声も聞かれます。福祉施設においては、ご利用者や職員に与える影響についてあまり語られることはありませんが、その影響は無視できません。

はちす苑でも、ご利用者から「マスクで顔がよく見えない」といった話は聞かれることは少なくなりましたが、もしかしたらご利用者もこの状況に慣れてしまったのか、または言い出しにくいのかもかもしれません。しかし、職員の表情が伝わりにくいことは事実です。私たち職員は、現状に慣れることなく、丁寧で分かりやすい話し方と満面の笑顔で、ご利用者が安心できる

ようなコミュニケーションを心掛けていきたいと思えます。

(はちす苑 苑長 安部 一義)

□民生児童委員とケアマネジャーの交流会（南部地域包括支援センター）

22日(金)、民生児童委員とケアマネジャーの交流会を開催しました。南部包括ではコロナ前に一度開催したことがありますが、定期的に行われていなかったため、ほとんどの方にとっては初めての参加となりました。民生児童委員 9 名、ケアマネジャー14 名、計 23 名が参加しました。

初めは自己紹介を行う際に緊張感が漂っていましたが、4 グループに分かれてからは、時間が足りないくらい盛り上がり、活発な意見交換が行われました。「お互いの役割や仕事内容を知ることができて良かった」「民生委員が地域でさまざまな活動をしていることを知れて良かった」という声が多く、好評を得ました。また、「定期的継続してほしい」「民生委員が関わった事例を交えて話をしてみたい」という要望もありました。

来年度以降は、定期的な開催を目指し、この交流会が皆さんの年間予定に自然に組み込まれるよう、根付かせていきたいと考えています。

(南部地域包括支援センター管理者 森 由美子)

□南部文化祭（南部地域福祉センター）

11月2日(土)～4日(土)の期間、当センターの教養教室や同好会、一般利用者、佐倉市在住の方々から募集した作品を展示する「南部文化祭」が開催されました。この文化祭では、「絵画、ニットサークル(編み物)、陶芸、七宝焼き、木彫り、生け花、水彩画、油絵、クレイアート、絵手紙」など、毎年多くの作品が展示されています。愛光からは「陶芸班、さおり織り、木工班」が出展し、来場者はそれぞれその場で足を止め、愛光の作業班の素晴らしさをアピールする良い機会となりました。

開催に向けて事前準備を早期に行ったことにより、昨年と比較して混乱なくスムーズに進行することができました。その後、来場者からのアンケートには「何年も前にいくつかのサークルに参加していたので、懐かしい思い出がよみがえった」「高齢者の能力の高さに感心した」「展示作品の多さに感動した」「私も趣味として何かを作りたい」といった前向きな意見が多く寄せられ、地域の中で非常に意義のある文化祭となったことがうかがえました。

(南部地域福祉センター 青山 秀人)

□幼児体操教室（佐倉市南部児童センター）

5年ぶりに、年中・年長児を対象とした幼児親子体操教室を開催しました。講師には佐倉げんき体育クラブの吉澤友則氏を迎え、昨年から小学生向けの体操教室も同講師に依頼して実施しています。体操教室は幼児期から始める習い事として人気があり、体を動かす楽しさを感じてもらいたいという思いから、この機会に再開を決めました。

しかし、募集を告知した際、思わぬハプニングが発生しました。この日は近隣幼稚園の行事と重なってしまい、最終的に参加した親子は3組のみとなりました。参加者と講師には申し訳ない気持ちでいっぱいでしたが、さすがはプロの講師！「疲れないように、休み休み話をしながら進めましょう」と心強い言葉をかけていただき、スタッフ一同も気持ちを切り替え、一緒に盛り上げながら体操教室がスタートしました。

普段と違う雰囲気緊張して遊戯室に入れない子どももあり、ハラハラする場面もありましたが、参加人数が少なかった分、一人ひとりにしっかり声を掛けながら進めることができました。マット運動では前転・後転のコツ、縄跳びの腕の回し方、鉄棒の後ろ回りのポイントなど、講師が丁寧に子どもたちに伝えながら進行しました。これらの内容は小学生になったら学ぶことが多いため、親子で一緒に参加することで、パパやママも隣で学び、今後子どもに教える際に役立つと感じたようです。

初めは少し緊張気味だった親子も、講師の楽しいトークで自然と笑顔になり、後半は笑い声が響き、パパやママと頬を寄せ合う微笑ましい光景も見られました。今年の体操教室は、開催時期の調整が課題として浮かび上がりましたが、来年度継続に向けた良いスタートを切ることができました。
(南部児童センターインストラクター 吉田 知加子)

□外遊びで感じる『秋』（学童保育所）

日が沈むのと並行して、気温が下がるのが早くなってきました。そこで、学校から学童に帰ってきた後、荷物を置いてすぐに外遊びに出るようにしてみました。宿題を先に終わらせたい児童は、室内に残り、終わり次第外に出ていきます。外遊びの際には、本を持って出る女児もいます。無理に出なくても良いことを伝えたものの、「外での読書が気持ちいい」とのことでした。そんな女児たちも、しばらくすると走り回って遊んでいた児童たちと合流し、氷鬼をしていました。「そろそろ戻るよー！」という職員の声掛けに、「もうそんな時間か〜」といった声も聞こえてきました。秋の外遊びはあっという間です。(弥富学童保育所より)

(学童保育所主任 平野 美幸)